

奥様もレズ

見沢栄美奈(みさわ・えみな)は、焦っていた。三十になって、子供もいないのに夫はアメリカに単身赴任したからだ。

2DKの五階建てのマンションには、色々な奥様がいるが、栄美奈と親しい同年齢の夫人はマンションの廊下で、

「見沢さん、ご主人はアメリカに行かれたんですってね。」

と話しかけてきた。見るからに豊満なその婦人は、162センチで90センチの胸と尻。目はパッチリとした、それでも人妻とすぐ分かる顔。

「ええ、三ヶ月になりますのよ、おほほ。」

と栄美奈は上品ぶって答える。栄美奈も159センチ、88センチの胸と92センチのヒップを持っている。

栄美奈の髪は肩まで伸びている。

「三ヶ月ねー、うちは出張でも二日くらいかしら。三日もいないと、大変に思いますの。わたし、三十一だけど、栄美奈さんは三十歳でしたわよね。」

「え、ええ。そうですけど。何か?」

「ふっふっふ。大きな声では言えないけど、やっぱり、夜の生活があ

るわよね。」

「は、はあ。」

その夫人の名は、島北桃代(しまきた・ももよ)という。

「それで三月もなしでは、辛くないの？」

と明け透けに桃代は聞いてくる。

「それはもう、我慢すれば・・・。」

「それは二十世紀の日本人女性の生き方よ。それに不倫という言葉も該当しない遊びもあるんだから。」

と桃代は話すと、巨乳を揺すって笑顔になる。

「遊び・・・ですか。」

と栄美奈は興味深く尋ねた。

マンションの廊下は広いとはいえ、いつ人が通るか、わからない。桃代は、

「こんなところじゃ、話せないからウチに上がってよ。それから、話すわ。」

と数歩歩いて自室の玄関前にスーパーのビニール袋を持って、立つ。

栄美奈は同じく歩くと、

「それでは、お邪魔します。」

と同意したのだった。

桃代は六畳の居間の方に栄美奈を通してくれた。

こげ茶色のソファに茶色いテーブル。部屋の壁際にあるのは大きなディスプレイ。横幅が六十センチはある。栄美奈は、それを見て、「大型テレビですか。」

「パソコンのディスプレイよ。うちは、テレビないの。主人はインターネット関係の会社に勤めているから。」

「あ、うちもないですわ。集金に勝手に来るのを完全に追い返すためにも。」

「テレビにもしまだ拘る人がいたら、パソコンのディスプレイが小さいのが問題よ。インターネットをしてない人ならテレビ見ないと、しょうがないけど。」

栄美奈の大きな目は、そのディスプレイをボンヤリと見ていた。

桃代はDVDをパソコンに入れた。パソコンの大きなディスプレイにDVDが再生され始めた。

レズ一直線

HHC制作

と二人の眼にタイトルが映った。

女子高に通う主人公、秋庭柔子(あきにわ・やわらこ)は、もう十八歳となった。乳房も膨らんだが、女子高の柔道部は女子だけだ。

日本一、いや、世界一の女子柔道家を目指す彼女は、高校の部活動だけでは物足りない。

福岡市中央区に古くからある道場、柔心館に部活動が終わった後、稽古に通う。

そこは男子がほとんどの荒いところ。館長の車沢矢八は講道館柔道八段にして、追放の身となっている。

それというのも、彼が考案した新しい柔道の技は講道館では認めなかったのだが、五十歳にもなって、東京の新橋の居酒屋の前で五人の若い反社会的な組織のいかつい兄ちゃん達に逆に自分でぶつかって、因縁をつけた。

「おい、どこ見て歩いとるんだ？」

「なにおー、おっさん。あんたが、ぶつかったんだろ。謝れよ。」

「うるさいっ。若造。」

「なんだと、じじい。」

黒のサングラスをかけた体格のいい男が、車沢矢八の胸倉をつかんで、持ち上げた。その瞬間、若者は、

「いたーっ。」

と悲鳴を上げて投げ飛ばされていた。残りの四人は、いっせいに車沢矢八に殴りかかっていったが、全員、空中を舞い、地面に叩きつけられた。

五人とも、股間に手を当てて、気絶している。車沢は、

「見たか。秘儀、ちんこ落としだ。」

と声を掛けると、その場を悠然と立ち去った。

五人のチンコは半分、引き裂かれていたという。五人とも外科手術で陰茎を縫い合わせたらしい。車沢矢八の「ちんこ落とし」とは、相手の陰茎を握り、体勢を崩して投げる投げ技だ。

講道館始まって以来、いや、柔術の時代にもなかった投げ技なのだが、当然のように認められなかった。それで、車沢矢八は自分の技を使うために、新橋で兄ちゃん達に因縁をつけて投げ飛ばしたのだ。

その破壊力はすさまじく、反社会的な組織の兄ちゃんたちが警察に訴えたが取り合ってもらえずに、柔道の投げ技だったと講道館に出向く

と、車沢矢八の「ちんこ落とし」と分かったために、車沢を破門にしたのであった。

その時、車沢矢八は故郷の福岡市に飛行機で帰るといふ早業を見せていた。

秋庭柔子は皆帰った夜の九時ごろの道場で、師匠の車沢に、

「秋庭は十八になったのう。ちんこ落とし、でも教えてやろうか。」

と言われた。柔子は顔を赤らめて、

「ちんこ、落としですか。はい、習いたいです。」

「よし、教えてやる。見栄理、来なさい。」

大声で隣の部屋に声をかけた車沢は、娘の見栄理、二十歳が柔道着を来て股間に何かを身につけて入って来たので、

「さ、見栄理、秋庭に「ちんこ落とし」の練習をさせてやれ。」

と言いつける。見栄理は身長百八十センチの大女で、柔子は百五十五センチだ。

「はい、お父様。柔子、わたしの股間にあるものをチンコだと思ってね。」

見栄理の股間に装着されていたのは、大きなバイブレーターだったの

だ。

父の矢八は、

「こうするのだ。そーれ。」

娘の股間のバイブレーターを右手で握ると、下に引きつつ、左手は娘の右手を握って自分の体を反転させる。

ポーン、という感じで見栄理の体は空中に飛び、畳の上に落下した。

矢八は柔子に、

「わかったかな?ここを握られて抵抗する男は、おらん。よって、最強の技なのだが、講道館は認めてくれなかった。おれは福岡で、これを広める。娘には、もう伝授してあるから。次は柔子だよ。暴漢撃退にも役立つしな。」

四角い顔に鼻の下に髭を生やした車沢矢八は、炯炯と光る眼球に笑みを見せる。

柔子は素直に、

「少し、わかりました。とにかく、やってみます。」

と返答すると、立ち上がって自分の前に来た見栄理の股間のバイブレーターを握って、師の真似をして投げると、見栄理の体はヨロヨロと倒れた。矢八は、

「よし。初めにしては上出来だ。よく練習しなさい。」

と柔子を激励する。

見栄理は父の方を向くと、

「でも、お父様。この技は男性にしか、使えませんね。女性には、わたし、まんこ落としがいいのではと思います。」

「ほっほう。まんこ落としか。それは、いい。これからは女性の社会進出とかで、入用になるかもなあ。でさ、見栄理、それはもう技として、できとるのか?」

「はい、お父様。柔子にかけますわ。」

と言うが早く、見栄理の右手は柔子の股間に伸び、彼女の柔道着の上からマンコを掴んだ、と思ったらチンコ落としと同じ体の動きで柔子は投げ飛ばされていた。

なかなか起き上がれない柔子に見栄理は近づいて、

「マンコ、大丈夫?柔子。」

と呼びかける。柔子はマンコを両手で押さえて、

「少し、痛いです。抵抗していたら、もっと痛くなっていたと思います。」



見栄理は少し安心して、

「その位ならね、大丈夫よ。それにマンコって、もともと裂けているわけだから、割れ目が伸びても問題ないし。男の人のチンコみたいに、ちぎれたら大変なわけでもないからね。

お父様、わたし、この技を中洲で若いチンピラ女に使ってしまったんだけど、よかったのかな?」

「いいだろう。で、どんなだったのかね、それは。」

大女の見栄理は中洲の飲み屋街を夜、歩いて茶髪でサングラスをかけた中年の巨体の女にわざと肩を当てた。

グダッ、と音が出るほどのぶつかり方だ。

茶髪中年女は、

「痛い。何するんだ、謝れ。」

と見栄理にどなりつけて、近づいてきた。見栄理は立ち止まって平然と、

「あんたの肩が、よけないからよ。」

と、うそぶく。

茶髪女はポケットから剃刀を取り出すと、

「顔で覚えるよ、ガキ。」

と見栄理の顔に斬りつけてきた。見栄理は身を沈めると、茶髪大女の股間に右手を伸ばし、スカートの上からブクブクのマンコを掴み、左手は茶髪の右手を掴んでいた。

見栄理が体を反転させると、茶髪大女は空を舞い、コンクリートの地面に叩きつけられて気絶した。

スカートは捲れて、股間を押さえたまま失神しているのであった。

という話を娘から聞くと車沢矢八は、

「でかしたぞ、わが娘よ。その技、まんこ落としを道場の男性に伝えなさい。」

「はい、お父上。」

と武家の娘のように見栄理はバイブレーターを装着したまま、頼もしく答えるのだった。

ここまでは劇みたいだが、AVなだけに次は秋庭柔子が柔道着を着てスタジオのマットの上で、全裸のAV女優十人を、まんこ落としで投げ飛ばしているシーンになった。

次々にマットの上に投げられてAV女優は股間に両手を当てて、

「ああん、痛い。まんこ、伸びそう。」

とか、

「オマンコ、切れそう。」

とか悲鳴を上げている。

島北桃代は見沢栄美奈に、

「すごいでしょ、まんこ落とし。」

と画面を見ながら話しかける。

「すごいですね。秋庭柔子さんって、オリンピックには出ないのかしら。」

「車沢さんの道場はJOCに認められてないんですって。それと全世界柔道選手権とか全日本とかにも出れないそうね。」

「それじゃあ、本当に日本の秘密兵器ですね。」

と残念そうに栄美奈は嘆く。

「でもね、本当に福岡市にあの道場、柔心館はあるのよ。渡辺通りらしいけど。だから、見に行ったりできるわ。」

と桃代は言う。

「ほんとですか。まんこ落としや、ちんこ落としも習えるわけです

ね。」

「それは、かなり年月を経ってないと駄目らしいわ。」

「やっぱり、ですね。ひまな主婦ですけど、今から柔道を習うのは無理ですね。」

「そうね、柔道は無理でもレスなら、いいかもよ。」

と桃代は悪戯っぽく話す。

「え、レス?でも、相手が・・・。」

と戸惑う栄美奈に桃代は、

「わたしが、いるでしょ。目の前に。」

と声を掛けると、桃代は栄美奈の肩を抱いて唇を素早く重ねた。ねっとりとしたキスだが、男の唇とは違って柔らかく、栄美奈にも今まで未経験な感覚だった。

唇を重ねつつ、桃代は栄美奈の豊かな乳房を上着の上から優しく揉んだ。

その指先は細く柔らかで、男の指とは違った。栄美奈は夫の指しか知らなかったのだから、自分の乳房が女性の指を知る事になるとは思っていなかったのだ。

夫の指が自分の胸を揉んだのは、もう大分前の事だろう。

三ヶ月前に赴任したとはいえ、夫婦間の性交渉は途切れがちになっていた。栄美奈の夫は仕事に忙しく、他の女性と浮気などはしていなかったのだが、それでも彼女の性的不満が収まるわけではなかった。それにしても桃代の指使いは、マッサージ師のように心地よい。

二人の前のディスプレイは黒の画面に戻っていた。

夫は浮気をした事がない。でも、その力は仕事に取られていくのだった。そういった場合、他の男に走るという事が彼女にはできなかったのだ。

では、桃代は、どうだろう?彼女の夫は浮気などしないのだろうか?

桃代が唇を離した時、栄美奈は乳房を揉まれながら聞いてみる。

「島北さんのご主人は、お仕事の方はどうですか?」

桃代は不思議な微笑を浮かべると、

「ああ、仕事ね。実は主人の仕事、おかまバーの経営なの。」